

2020 年度 JAMS 研究大会

個別研究報告・若手研究報告 要旨集

個別研究報告

【報告1】 マレーシアのインド人コミュニティにおけるヨガの実践とスピリチュアリティの「排除」：2008年のファトワ後の展開

栗原美紀（上智大学アジア文化研究所）

マレーシア社会では、2008年にヨガがヒンドゥー教に帰属する文化であるというファトワが出され、実践者は信仰する宗教問わず、ヨガと宗教との混同を避けようとする動きが強い。本研究では、こうした状況の中インド人ヨガ実践者がどのようにヨガを展開しているのか明らかにする。報告者は2017年から断続的に、クアラルンプールのヨガクラスでの参与観察と指導者への聞き取り調査を行ってきた。結果として実践者たちは、ヨガに使用される宗教的表象をできる限り排除し、代わりにスポーツやフィットネスの側面を強調している。しかしこうした対応は、実践者たちがヨガからスピリチュアリティや文化性を排除したことを意味しない。実際には、これは対外的なイメージづくりであり、実践者内では「スポーツ」や「科学」という言葉の意味を拡大解釈することで、内容や目的の実質を維持している。そうすることで、インド人ヨガ実践者たちはマレーシアで自身の実践を守ると同時に、国内でのヨガの拡大を促している。

【報告2】 新経済政策期の教育政策とマレー系の職業的地位達成——マレー系における学歴インフレ発生の検証

田中李歩（東京大学大学院）

新経済政策期（1971～90年）のマレーシアは、マレー系優遇政策の一環として初等・中等教育機関を増加させ、マレー系の人びとの教育へのアクセスを改善するとともに、マレー系専用の特別な教育機会を創出し、マレー系の教育競争への参加者増加と教育アスピレーションの上昇を引き起こしたと考えられる。実際にマレー系は、後期中等教育段階で新経済政策期にどの民族よりも高い教育達成を遂げるようになった。たとえば1969年生まれの中国系やインド系では、後期中等教育以上の教育を受けた人の割合は50%に満たないのに対し、マレー系では71%と高かった。

しかしマレー系は社会内の少数派ではなく多数を占めていたが故に、高い学歴を得る人

が増えたにもかかわらず、そこで得た学歴をすべての人が活かせるよう職業の口が用意されることはなかった。その結果、以前はより低い学歴の人が就いていた仕事に高い学歴の人が就くようになる学歴代替雇用という現象が生じ、またそのような状況下で少しでも望ましい仕事や高い職位に就くために多くの人びとがより高い学歴を求めて教育競争を加熱させる、学歴インフレの状況が生じていたようである。マレーシア人口住宅センサスの個票データ(1970, 1980, 1991 年) の分析を通してこのことの解明を試みたい。

若手研究報告

【報告1】 いか「国民」とならないか —ブルネイの国籍法・ID カード・パスポートを例に—

赤坂 知美(京都大学大学院)

本研究は、多民族国家ブルネイにおいていかに人々は「国民」となるか、もしくは「国民」とならないかを明らかにすることを目的とする。発表においては、「国民」もしくは多数派「マレー人」の枠組みから外れ、周縁化された民族に焦点を当てる。ブルネイでは1956年憲法制定時、7つの民族を「マレー人」として範疇化し先住民と規定した。一方で、「マレー人」に定義されなかった華人やイバンは国籍を与えられず、現在も無国籍のままの者も多い。本発表では国家が個々人の属性を規定するアイデンティフィケーション、つまり国籍やIDカード、パスポートに着目し、これらの装置と国民意識の関係について論じる。ブルネイは国境を越えてサバヤサラワクへと移動することが常態化したトランスナショナルな空間である。そのような空間で、いかに国籍やIDカード、パスポートといった国家からのアイデンティフィケーションが意味を持つのかを、2018年から2019年にかけて行った現地調査とインタビュー調査を基に考察する。

【報告2】 19世紀末から20世紀初頭のメダン華人カピタンとペナン島の華人系秘密結社

デフィン・スカルディ(京都大学大学院)

本発表では、19世紀末から20世紀初頭のスマトラ島東海岸の商業都市メダンにおける華人カピタンとペナン華人の秘密結社(会党)との関係について考察する。メダンおよびその近辺の農園地帯は、英蘭協約が締結されても、オランダによる開拓が実現されるまでに45年を要した。オランダ統治以前のスマトラ島、とりわけ現在のリアウ州以北の交易や流通は、対岸の華人の主導のもとで動かされていた。このため、オランダがデリ農園地帯を開拓した1860年代中葉には既に海峡華人のネットワークが活性化しており、彼らに取って代わる勢力は存在しなかった。1870年代以降デリの一次産品農園における苦力の需要が拡大したことにより、海峡植民地(特にペナン島)のもとで務める「客頭」を介して苦力の徴集や輸送

が行われた。デリの経済拠点となったメダンの華人社会史を論じるには、ペナン島は欠かせない部分である。本報告では、メダンにおけるペナンの華人会党の興亡と組織間の対立を論じ、カピタンとどのような関係を築き、互いの利害関係を有していたのかについて、今後の研究の可能性を報告する。